

高橋 英吉  
(石巻市教育委員会提供)

丸いめがねの奥の優しいひとみ、おだやかで人なつっこい笑顔の男性は、高橋英吉という石巻市で生まれ育った彫刻家です。

英吉は、網元で遠洋漁業や大きなかんづめ工場を経営していた家の五男三女の末っ子として育ちました。小さなころから絵や工作が大好きで、宮城県立石巻中学校（現在の石巻高等学校）に入学してからは、授業中に机に立てた教科書の陰にかくれ、小刀で鉛筆やチョークに彫刻を彫ったというエピソードがあります。また、学校の机にも夢中になって彫った般若面が、現在の石巻高等学校にしばらく残されていたようです。

網元：  
漁船や網を多く  
持っていて、多く  
の漁師を使ってい  
る人。

般若面：  
鬼の形相をした女  
のお面。

中学在学中から、

「彫刻の勉強をしたい。もっと本格的に学んでみたい。」

と夢を描くようになり、東京の美術学校への進学を決意しました。家族は反対していましたが、母だけが英吉の夢を後押ししてくれました。英吉は家族に迷惑をかけまいと、荷物一つ持たずに上京し、昭和六（一九三二）年、東京美術学校（現在の東京藝術大学）彫刻科木彫部に入学することができました。

「この学校は彫刻家になるという自分の夢をかなえる場所だ。自分の心の中にあるもの、思いを形にしたい。」英吉は、作品の制作に没頭し始めました。当時は、昔ながらの彫り方で仏像中心の彫刻が主流でしたが、英吉の彫刻制作に対する考えは少し違っていました。そして、完成したのが「少女像」という作品で、文展に出展し入選しました。この作品は、美術を学んでいる人たちから、



少女像（宮城県美術館所蔵）

「新しい形の彫り方だ」

と高い評価を受けました。

「これで少しは自分を支えてくれた母、応援してくれたふるさと  
の皆を安心させることができる。」

英吉はそう思い、入賞後も作品を作り続けました。

しかし、新たに作品を作っても、英吉の心は少しずつくもって  
いきました。

「だめだ……。まだまだ納得できない。」

毎日の生活が苦しいこと、軍隊に入りなさいという命令がいつくるかという不安もありましたが、何より一番は、なかなか自分が満足できる作品ができないのです。

「自分に足りないものは何だろう。」  
前に進むことができず、不安とあせりばかりがつのるのでした。英吉は真の彫刻が分からなくなっていきました。そんなとき、英吉の目にうかんできたのは、きらきらとかがやくふるさと石巻の海でした。  
「帰ろう。石巻に。」

石巻に戻った英吉は、彫刻を「もっと学びたい」と思っていた最初の気持ちを出しました。ふるさとの海と向かい合ううちに世界中の海を見て想像を広げたいと思うようになり、知人に頼みこんで、船に乗せてもらうことにしました。その時、海を見つめる英吉の厳しい横顔には新たな強い決意がこめられていました。

南氷洋という遠くの外に出るクジラを捕まえる船に乗ることにしたのです。昭和十二（一九三七）年、二十六歳の時でした。捕鯨船での生活は、本当に辛く厳しいものでした。強い風と雪が激しく体に当たります。漁師たちは、せまい船室で寝泊まりして長い間家族に会うことができません。また、一度船に乗ると簡単には

文展：

文部省美術展覧会  
の略称。戦前の日  
本では最も注目を  
集める美術展とし  
て、美術の普及に  
大きな役割を果た  
したといわれる。

降りられず、病気やけがをしても病院には行けないので、命をかけたものとなりました。

英吉は、仕事が終わると船室に入り、捕鯨船の乗組員たちの姿を思いうかべデッサンするのです。皆が寝静まってからも描き続けました。自分の見たもの、感じたものがあふれるように出てきます。美術学校に入学した時決意した（自分の思いを形にする）という自分自身に問い続けた答えを探すように、描き続けました。

「あらゆる命のものは海にある。」

真っ白に輝く氷の山、海原で生まれた巨大なクジラ、夜空に輝く南十字星、この航海の経験で得たものは、英吉の目と心にしっかりと刻まれました。

「大自然の美しさと厳しさ。その中で感じた生命、苦しさ、辛さ……すべてをこめて表現したい。」  
氷山の中をかきわけ、氷を押し破りながら海を突き進む捕鯨船は、英吉に大きな希望を与えました。  
半年の長い航海を終え、英吉は、航海でたくさんの宝物を持ち帰りました。

東京に戻ってからは、アトリエにこもり、制作に取りかかりました。海で働くたくましい男たちを彫ったのが、「海の三部作」といわれる「黒潮閑日」「潮音」「漁夫像」です。最初の作品である「黒潮閑日」は文展で入選、続けて「潮音」は特選という出展作品の中で最高の賞を取りました。若き天才彫刻家として、英吉の名は世間に知れ渡りました。「潮音」を制作後、英吉は結婚して女の子が誕生しました。三部作の最後の作品「漁

「海の三部作」  
(石巻市教育委員会所蔵)



黒潮閑日



潮音



漁夫像

夫像」が完成したころでした。

英吉は、家族を持ってますます制作に対する意欲が高まり、世界に通用するような作品を作りたいと気持ち

が動き始めました。また自分自身の追い求めるものへの新たな挑戦が始まったのです。  
次の自分の目標が見つかりかけたころ、英吉のもとに、戦争で兵隊として出向くよう通知が届きました。英吉は、戦場へ向かう船内で、「不動明王像」を彫りました。拾った木の棒切れと釘のようなものをノミとして使い、こつこつと彫り続けました。しかし、これが英吉の最後の作品となりました。戦場に行くときでも、夢をあきらめず、自分の心の中にあるものや思いを表現し続けました。家族の幸せや無事を願いながら、生きて帰ってまた作品作りをしたいという強い思いをこめながら……。



不動明王像  
(石巻市教育委員会所蔵)

英吉の作品は、展示されていた石巻文化センターが東日本大震災の津波で大きな被害を受けたため、新しい施設ができるまでの間、宮城県美術館に保管されています。限られた時間を精一杯生きた英吉が、夢を追い求めて制作した「生きた証」は、今も多くの人々に勇気と希望を与え、私たちを見守っているのです。

### 高橋 英吉

高橋 英吉は、明治四十四（一九一）年、牡鹿郡石巻町湊本町（現在の石巻市湊町）に生まれた。たくさんの優れた木彫作品を制作し、若くして天才彫刻家と称えられた。海の三部作と呼ばれる三つの作品は、彫刻家としての地位を確立するものとなった。将来を期待されていたが、第二次世界大戦に出征し、ガダルカナル島で三十一歳の若さで戦死した。

航海…  
船で海の上に行くこと。

証…  
そのしるし。

出征…  
軍隊の一員として戦地へ行くこと。